

## 「拡散と炎上」

大学生の頃、コンピューター関連の会社でアルバイトをしていました。会社のホームページを作ったり、パソコン教室の先生をしたり、今思えば、非常に役立つ経験を積ませてもらいました。その時に、ベテランのシステムエンジニア、とてもパソコンに詳しい人から、こういう助言を頂きました。「パソコンで何かをしていて、不具合が出て来る時。よく分からないエラーメッセージや、意図しない挙動が現れる時。とりあえず、慌てずに詳しくその状態を書き留めてください。メッセージの内容、挙動の仕方をちゃんと人に伝えられるように記録しておくこと。どんなに詳しい人でも『なんかパソコンが動きません』じゃ、直せるものも直せません」と。これは、確かになあ、と思いました。パソコンに限らず、私たちは何か自分の不得意なところで、想定外の困難に直面すると、「困ったこと」にばかり気持ちが持って行かれ、その状況を詳しく分析したり、記録したりというところまで思いが及ばないことがあります。これじゃ、相談を受ける人も、どうアドバイスしたら良いのか、判断に窮するということですね。あともう一つ、こんな助言も受けました。こっちの方が、個人的にはもっと人生の真理のような気がしています。「これも、困った時に思い出して欲しいですけど、もし何らかの不具合に遭遇した場合、自分が、その不具合の第一発見者である可能性は、限りなくゼロに近いと思ってください。つまり、あなたが遭遇する不具合や困ったことと言うのは、十中八九、誰かがすでに遭遇していることなので、ちゃんと調べたら情報は見つかるはずです。パソコンには色んな不具合がありますが、自分しか知らない不具合に遭遇していると判断して諦めるのは、ちょっと傲慢ですね」と。この助言は、私にとって目から鱗のようなものが落ちる指摘でした。パソコンを直す上でもそうですけど、生きる上で困難に遭遇する時の心構えとして

も、大いに学びがあると感じました。もちろん、パソコンよりも、人生の方が、だいぶと複雑で明確な解決法など存在しない、困難な道のりです。けれど、それでも、あらゆる不幸や不条理について「自分が世界で初めて悩んでいる」可能性はかなり低いと思いますので、早めに誰かに相談したり、あるいは専門家に委ねたりしてみることは、精神衛生上、極めて良いことのように思います。

そして、時には、と言いますか、常々、聖書の御言葉に耳を傾けてみることも意外と有意義なんじゃないかと。聖書も、偽ることのない人間模様の百科事典みたいなものですから、今、自分が遭遇している悩みであったり、今の社会が経験している問題であったりについて、何らかの関連情報を提供してくれるものと、私は思っています。2000 年以上昔の古文書ですから、現状に照らして不適切な箇所を解釈し直したり、切り離したりしながら読む必要も、もちろんあります。でも、その 2000 年以上の実績に裏打ちされた「人間って、やっぱりこうだよ」と、「だから、まあ、仕方ないよね」と、そういう良い意味で踏ん切りがつく、達観に至る、そういうお話も多々収録されています。

例えば、今日の聖書箇所は、結論から言ってしまうと、「どんなに良いことをしても、批判する人は必ずいる」という残念だけど、如何ともしがたい人間模様の一側面と、「インターネットの無い時代にも、耳目を集める話題を拡散する人と、それを炎上させる人っていたんだな」という情報共有する上での避けがたい一現象について報告しています。情報化の時代と言われて久しい現代社会ですが、その内実というのは、聖書の時代の人たちとあまり変わらないのかも知れない。その事実をして、現代社会の不具合に目を瞑るわけじゃありませんが、「こんな酷いことを言う人なんて初めて知った」と思うのと、「聖書にも似たような人が出て来てたし、昔からそういう人いるんだな」と思うのとでは、多分、その先の対応の仕方や、社会の読み方に違いが出て来る、ということは言えるかと思っています。

そんなことを思いつつ、今日の聖書箇所を少し丁寧に読んでいきたいと思います。まずは二人の盲人を癒すというお話からです。聖書の文脈において、「目の見えない人が、見えるようになる」という奇跡は、視力の回復という身体的な癒しに留まらず、「光を見る」という宗教的体験と「展望が開ける」という前途有望な信仰的確信を表現するという意味も込められています。ここでは、「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでくださり」という、遜った信仰の持ち主2人が、イエス様の問い掛けに誠実かつ真心から答えることで、二重三重の意味で「光を見た」という貴重な体験をしたことが報告されています。もっとも、この奇跡的な癒しの出来事を、「どう見るか」という点は、私たちの理性と信仰のせめぎ合いに拠るところが大きいです。「そんなこと、現代じゃ信じられない」という理解も妥当だし、「イエス様なら何でもお出来になる」と信じるのも相応しい信仰の形です。ただ、今日、特別に「着目」したいのは、目が見えるようになった2人へのイエス様の御命令と、その後の展開についてです。イエス様は、癒された2人に、「このことは、だれにも知らせてはいけない」と厳しくお命じになりました。これは、とくにマルコ・マタイによる福音書において顕著なイエス様のお姿で、この2つの福音書が報告するイエス様は、数ある奇跡行為について、必ず「黙っておくように」と命じられました。これは、福音書記者であるマルコとマタイの信仰理解が反映されたものであるとも考えられますが、ともかく、イエス様は、ここで自らの超常的な力が噂されることを避けたかったということです。しかし、この癒された2人は、「その地方一帯にイエスのことを言い広めた」と書かれています。これは、明らかに命令違反ですね。ただ、それが主の御計画に反しているかと言われると、神学的には、必ずしもそうではなく、ようするに、こういう命令違反が散発している時点から、イエス様の十字架の道のりは始まっていた、ということです。この二人には、その自覚は全く無かったでしょうが、彼らの言動が、十字架の遠因になったわけですね。結果的に、それはイエス様の死と復活という、御心の成就に繋がるものですが、で

も、「私が主を十字架につけた」という深刻な信仰的事実は、全く、そうとは意図しない振る舞いの中に在るのかもしれない、という受け止めは、私たちも知っていたいと思います。私たちの何気ない言葉が、行動が、神様を悲しませ、イエス様を傷付けることになるかも知れない。良かれと思ってやったことが、全く想定外の結末に至る、という現実、昔から見られることなんですよ。知らずに罪を犯す、知らずに誰かを追い詰める。だから、赦しを祈り求める姿勢は、私たちの信仰生活に欠かせないものと言えます。

良かれと思ってやったことが、にも関わらず、批判に晒されるという点については、「口を利けない人をいやす」というお話に分かり易く報告されています。このお話も差し当たって「悪霊を追い出して喋られるようにする」という奇跡をどう受け止めるが問われるところではありますが、ここでもとくに着目したいのは、最後に書いてあるファリサイ派の一言ですね。「あの男は悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」。この批判に関しては、イエス様は、また別の場所で反論されていますね。何と言いますか、そういうどうあっても難癖をつける人、どんな善行にも、どんな善意にも批判したい人って、今も昔もいるんだなあ、と思わされます。どんな方法であれ、喋れない人が喋れるようになって、それで「良かったね」と言えば良いものの、そう素直には受け止められないという。利害関係とか、主義主張の違いとか、色々な理由があって、ある人には光に見えるものでも、ある人には闇に見えるということも、残念ながらあるということかと思います。さらに付け加えるなら、このファリサイ派も、自らの正義に則って判断していたということです。だから、なおさら、悲しいお話なのです。

人間同士においては、そんな風な見解の相違、正義の衝突があるからこそ、私たちは、私たちを超えた方に祈り求める必要があるのだと思います。その祈りとは、別にキリスト教の神様にだけ限定する必要はないでしょう。仏に祈っても、八百万の神に祈っても良いと思います。そして、それ

ぞれの神や仏や、私たちの神様が、どうしても譲れないということで、天の上で頂上決戦をされるのは、別にあって良いと思います。あってはならないのは、不完全な信仰者に過ぎない私たちが、仏の名によって、八百万の神の名によって、私たちの神様の名によって争い、傷付け合うということです。自らの正義を至上のものとして戦い、攻撃し、炎上し。一方は勝ち誇って満足して、一方は敗北して貶められるという現実には、避けたいものですね。神様の御支配を信じて疑わない私たちは、とくに、その点を忘れないでいたいと思います。

宗教紛争が絶えない現代社会にあって、なかなか賛同を得にくい信仰だと思います。でも、それでも言いたいのは、自分を超えた方を信じる、付き従うというのは、本来、自分自身の正義や主張を謙虚さをもって柔らかくして、怒りも憎しみも全てを信じるべき方に委ねる、ということです。信仰とは、私たちの正義を研ぎ澄ますのではなく、私たちの正義を鞘に納め、それでも尚、私とあなたの幸せを願うことです。そんな奇跡みたいな平和が実現すると信じるのが、最も大切にしたい信仰だと、私は思っています。

意図せず、不本意な形で急激に情報が拡散し、残念な結果に至るような、そんな落ち着きのない社会を私たちは生きています。そして、様々な情報に触れて、怒り、悲しみ、自らの正義を容易く発信できる社会でもあります。個人的には、今の情報化社会は、私たちの能力を超えた手に負えない社会だと思っています。だからこそ、信仰ある私たちは、聖書から学び、大昔から似たような出来事があったことを知って、神様を信じるという立場から、余裕と優しさと配慮を示す生活を心掛けて参りたいと思います。怒る前に「まあ、そういう人もいるよ」と思い、冷静で建設的な対話ができるようにしてみる。批判する前に「なぜ、そう考えるのか、そうしたのか」と考え、興味と関心を失わない関係性を目指してみる。地味ですが、一人ひとりの情報発信力が強化された現代社会にあっては、そういう個々人の小さな振る舞いが案外、大きな影響力を持つのではないのでしょうか。

私自身は、インターネットもしないし、SNSもしないし、拡散や炎上とは全く無縁だとしても、私に関わる、この人やあの人はネットもSNSも拡散も炎上も経験しているかも知れません。そういう人たちに、私たちが信仰者の立場から、神様の愛とイエス様の優しさを、言葉と行いを通して伝えることで、少しは変化するところもあるんじゃないかなあと。

今の問題、今の悲しみや苦しみに寄り添うものとして聖書を読み、そこから学び、今に活かすという前向きな信仰生活を一緒に心掛けて参りましょう。最後にお祈りを致します。

神様。今日も私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたの与えてくださった聖書を読みながら、今も昔も、似たような対立があり、過ちと憎しみがあったのだと思わされます。あなたは、その決して褒められたものじゃない人の姿を、包み隠さず聖書に記してくださり、私たちの学びとしてくださいました。そのことを感謝して受け止め、現代の問題や、克服すべき課題に、私たちが取り組んでいくことができますように、導いてください。あなたの導かれる歴史は、聖書の時代に完結したのではなく、今なお進行形であり、私たちがあなたの平和の使者として期待されていることを謙虚に受け止め、それぞれの信仰と賜物を十分に活かすことができますように。お支えください。

このお祈りを平和の主であるイエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

9 月召天者を憶える祈り

コヘレトの言葉 3 章 1～11 節

1 天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。

2 生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、

3 殺すに時があり、いやすに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、

4 泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり、

5 石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、抱くに時があり抱くことをやめるに時があり

6 捜すに時があり、失うに時があり、保つに時があり、捨てるに時があり、

7 裂くに時があり、縫うに時があり、黙るに時があり、語るに時があり、

8 愛するに時があり、憎むに時があり、戦うに時があり、和らぐに時がある。

9 働く者はその労することにより、なんの益を得るか。

10 わたしは神が人の子らに与えて、ほねおらせられる仕事を見た。

11 神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。

大東寿美子 おおひがし すみこ し (2018 年 9 月 2 日召天)

中野末造兄 なかの すえぞう けい (1975 年 9 月 3 日召天)

山登信義兄 やまと のぶよし けい (1994 年 9 月 3 日召天)

源田仁吉兄 げんだ にきち けい (1977 年 9 月 9 日召天)

西田雅恵姉 にしだ まさえ し (1986 年 9 月 13 日召天)

|        |             |                     |
|--------|-------------|---------------------|
| 島 萬寿姉  | しま ます し     | (1949 年 9 月 14 日召天) |
| 清水辰郎兄  | しみず たつろう けい | (1954 年 9 月 14 日召天) |
| 羽根じゅん姉 | はね じゅん し    | (1996 年 9 月 14 日召天) |
| 幸田はる姉  | こうだ はる し    | (2010 年 9 月 16 日召天) |
| 増田正雄兄  | ますだ まさお けい  | (2003 年 9 月 17 日召天) |
| 木村照子姉  | きむら てるこ し   | (2012 年 9 月 24 日召天) |
| 関谷カズ子姉 | せきや かずこ し   | (2014 年 9 月 27 日召天) |

神様。あなたによって夏から秋へと移りゆく変わり目の日々を今、私たちは過ごしています。月と太陽をも支配し、実りと収穫の季節へとこの世界を導いてゆくあなたは、私たちの人生という名の季節をもお定めになり、その移ろいをも支配しておられます。今日、私たちは、9月に天へと召された敬愛する方々のことを憶えて祈りを合わせています。あなたがいつ、何を理由に、人の命を取られるのかを私たちは知ることができません。しかし、全てのものの支配者であり、また全き愛を顕される、あなたの下へと召された魂には、豊かな慰めと限りない平安があることを信じます。私たちもいずれは、この地上での歩みを終えて、あなたの住まうところへと帰ってゆきます。それまでの間、天の上にあるとの同じ、大いなる恵みとあなたの深い愛を感じることできる日々を、どうかお与えください。天にあっても、地にあっても、あなたと共なる日々が祝福で満たされますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。